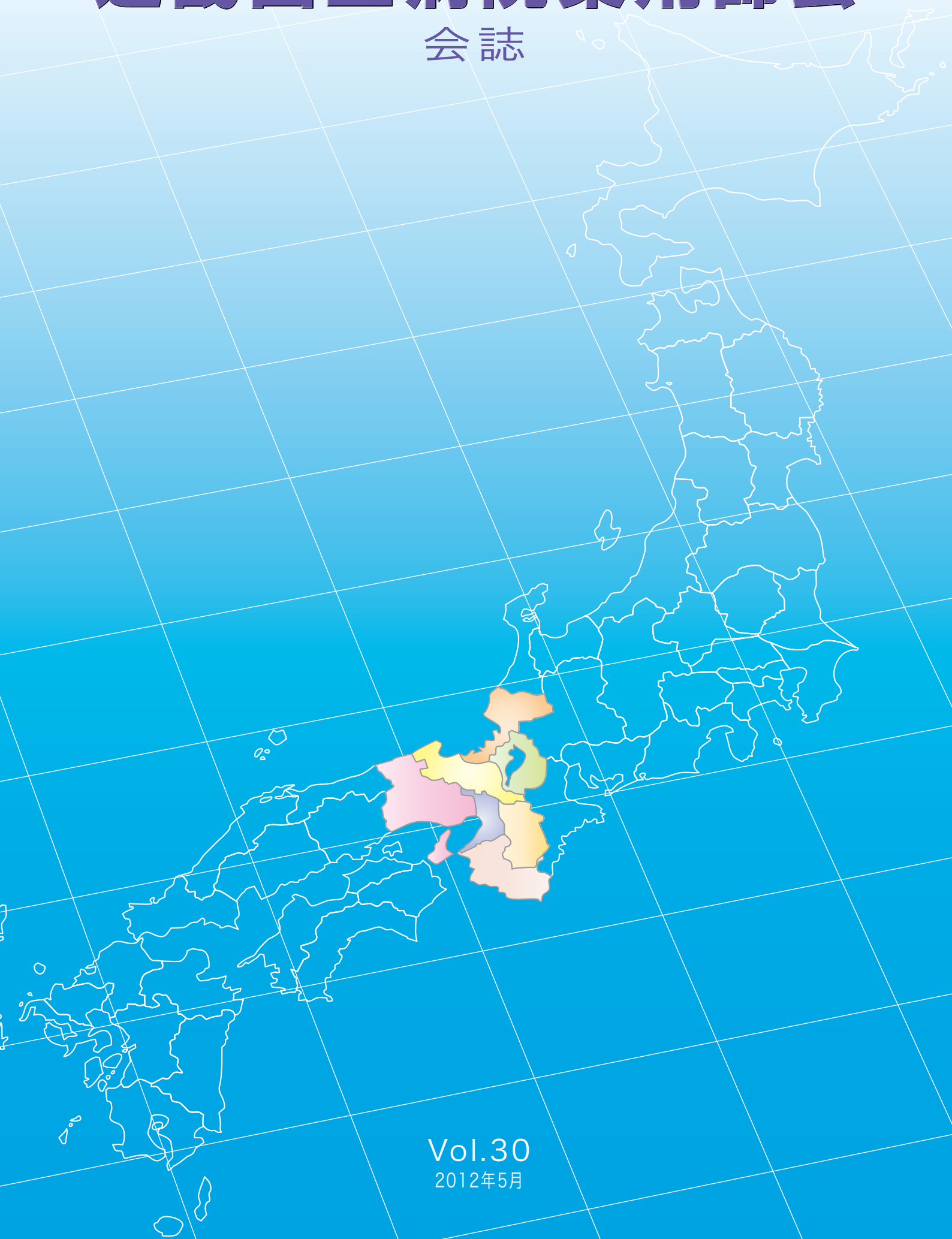


近畿国立病院薬剤師会

会誌



Vol.30

2012年5月

目 次

提 言.....	2
	やまと精神医療センター 田中 利夫
教育研修委員長挨拶.....	3
	南和歌山医療センター 岡田 博
業務検討委員長挨拶.....	4
	和歌山病院 砂金 秀美
薬剤科紹介.....	5
	福井病院 田村 憲昭
平成 24 年度近畿国立病院薬剤師会 講演会報告.....	7
	神戸医療センター 山田 雄久
平成 24 年度新採用薬剤師研修会に参加して.....	8
	大阪南医療センター 西澤 有紀
小児薬物療法勉強会の紹介.....	10
	京都医療センター 朴井 三矢
ASCO Gastrointestinal Symposium 2012 に参加して.....	12
	大阪医療センター 槇原 克也
病院薬剤師になって.....	14
	大阪医療センター 藤田 晃介
編集後記.....	15

提 言 「上司の哲学」

やまと精神医療センター 田中 利夫

病棟薬剤業務実施加算は、病院薬剤師にとって画期的なものとなったが、診療報酬改定の答申附帯意見に、「調査・検証を行うこと」の項目として「薬剤師の病棟業務」がある。病棟業務が勤務医負担軽減等につながっているか評価されるため、これからが実力を発揮する大事な時期である。

また、文部科学省「薬学系人材養成の在り方に関する検討会」が開かれ、入学生が定員に満たない、また5年次進級率が低い大学があるため、入学者の確保に向け、薬科大等を対象に書面調査や実地調査を実施するようである。人材育成が重要な時期である。

最近、「上司の哲学」という以前読んだ本を読み返してみた。部下に信頼される20の要諦からなる。以下に、いくつかの要諦を示す。

一つ「考え方を示す」。

方針の徹底こそが発展の基本として、どんな理想を持ってこの仕事をしているのか、常に言い続ける。また、部下が方針に沿ってやったけれども失敗した時には、決して叱ってはならない、とある。出した方針が、正しい方向に向かっているか、常に考えて行かなければならないし、その方針に対して責任を持たなければならない。

一つ「熱意を評価する」。

なんとしてもこれをやり遂げたい、成功させたいという強い熱意を持った時、すでに半ば成し遂げられたと同じ、とある。結果だけでなく、部下の考えていることを、十分理解し、評価する必要がある。これには、普段から十分なコミュニケーションを取っておく必要がある。

一つ「能力を引き出す」。

困難なことが、自分の目の前に現れた時、これは自分の新たな能力を引き出すチャンス、発見するチャンスだと思うべきである、とある。なかなか難しいことで、なんとか困難なことは避けたいと思ってしまう。しかし、やることによって必ず自分の身になるため、困難なことを、部下にやらせ能力を引き出してやる必要がある。

一つ「率先垂範する」。

山本五十六の言葉で「してみせて、言ってみせて、させてみて、ほめてやらねばひとは動かじ」自分がやってみせなければ、部下は動かない、とある。してみせるには自分自身が、十分理解してから指導する必要がある。中途半端な知識では、かえって逆効果である。

一つ「なぜを説明する」。

上司が部下に指示を出すとき「なぜ」を伝えなければならない。部下が上司に発案するときも「なぜ」をしっかり説明していく、とある。上司の指示、部下の発案とも、相手が理解し、表面的でなく、本当に納得できるよう説明しなければならない。

最後に、「人間的成長あってこそ理想の上司」と結ばれている。

私も、日々成長できるようにしていきたい。

ご挨拶

近畿国立病院薬剤師会 教育研修委員会委員長
南和歌山医療センター 岡田 博

このたび、教育研修委員会委員長を仰せつかりました。

就任に当たり、会員各位の皆様にご挨拶申し上げます。

教育研修委員会（以下、本委員会）の目的は、会則にありますように「教育・研修に関することを支援し会員の資質の向上を目的とする。」とあります。この意味するところは、本委員会は、会員各位がそれぞれ目的をもち資質向上のため自己研鑽を積み重ねている中で、会員各位を支援するための事業を立案、実施するためにあるということです。日頃、会員各位におかれてはいろいろな分野で自己研鑽されていることと思います。また、そういった先生方からもいろいろなご意見をいただいき、本委員会のより一層の活性化を図り、近畿国立病院薬剤師会のレベルアップにつなげたいと思っていますのでどうかよろしく願いいたします。

また、平成 24 年診療報酬改定の中で、病棟薬剤業務実施加算が新設されました。

これまでの薬剤師の病棟業務が評価された画期的なことだと思えます。しかし、病棟薬剤業務実施加算の評価については、2 年後に調査・検証がなされるので病棟薬剤業務をより一層充実させる必要があります。すなわち、会員各位のさらなる自己研鑽が必要となります。特に若い先生方には、医療の専門化・高度化が進む中、専門・認定薬剤師を一つの目標とし自己研鑽を積んでいただくようお願いします。資格を取ることが目的でなく、日頃の研鑽をとおりチーム医療の中で他職種からなくてはならない存在となることが重要なのです。まず、ジェネラリストをめざし基礎を固め、そしてスペシャリストを目指すことです。早い時期から専門分野を決める必要はありません。ジェネラリストなくしてスペシャリストはなりえないのですから。

以上、勝手気ままに色々なお願いをいたしました。これから、教育研修委員会メンバーそして会員各位のご協力のもと活動をしていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

業務検討委員会を利用して日常業務に役立てよう

近畿国立病院薬剤師会 業務検討委員会委員長
和歌山病院 砂金 秀美

近畿国立病院薬剤師会も平成 24 年度より北村新会長率いる新体制となり、業務検討委員会委員長を務めることになりました。少しでも薬剤師会活動が活発になり、各先生方の役に立つ委員会になるよう、微力ながら精一杯務めさせて頂きたいと思います。

さて、皆さんは会則を読んだことがありますか？また、業務検討委員会って何する委員会？当薬剤師会会則の細則（委員会）第 4 条の項に

（目的）近畿の施設ネットワークを生かし薬剤部科業務の効率化を図る。

（構成委員）原則、任命主任又は実務担当主任とするが、該当者のいない場合は、各施設の部科長に一任する。・・・

2 業務検討委員会には次の小委員会を置く。

薬剤業務小委員会、薬品管理小委員会、治験小委員会、情報管理小委員会と記載されています。

当薬剤師会の組織も一昨年に 3 委員会から 2 委員会（教育研修と業務検討）に改編され、当委員会の所属委員も上記のように変更されました。即ち、各施設において各実務を担当している先生方の集団で、各施設の代表者なのです。業務検討委員会及び各小委員会は年度事業計画を設定し活動していますが、目的にも記載されているように「施設ネットワークを生かし薬剤部科業務の効率化」を掲げています。例えば、今年診療報酬で新設された「病棟薬剤業務加算」について、部科長 ML では業務日誌などの管理面の情報交換が活発にされています。それでは、実際の実務はどうですか？他施設はどのようにしているか知りたくはないですか？何か困っていることはないですか？こんな時、気軽に情報収集や相談できるのが ML なのです。業務検討委員会には全所属委員を対象とした業務検討委員会 ML と各小委員会 ML が存在し、目的に合わせて使い分けして頂けたらと思います。必ずや、良い回答をして下さる先生方が沢山おられますよ！

このように、「所属・参加すると何か仕事をさせられる」から、このネットワークを生かして「利用してやる」といった考えで、皆さんが担当する日常業務がスムーズになるよう願っています。

薬剤科紹介



独立行政法人 国立病院機構 福井病院

概要

福井病院は福井県嶺南地域の二州保険医療圏における基幹的な総合専門医療機関として、高度で質の高い医療を提供しています。病床規模は 286 床（一般 150 床、重症心身障害 120 床、結核 16 床）で標榜診療科は 21 科にわたります。平成 19 年 1 月に地域がん診療連携拠点病院に指定され、重症心身障害児（者）医療・血液凝固異常疾患・結核を含む呼吸器疾患を政策医療として担っています。

沿革

当院は明治 31 年 3 月に敦賀連隊区司令部敦賀衛戍病院として開設され、その後国立療養所敦賀病院に改称する。その後、平成 15 年 7 月 1 日に国立療養所福井病院と統合し、国立福井病院となり、平成 16 年 4 月 1 日に独立行政法人国立病院機構福井病院と改称され、現在に至ります。



右写真：野坂山（標高 914m）を背景に撮影した当院
（平成 24 年 4 月撮影）

当院理念

私たちは、患者さんの立場に立った 開かれた医療、患者さんに信頼される 質の高い医療を提供します。

基本方針

- ・国の実施する政策医療である、「がん、呼吸器疾患（結核を含む）、重症心身障害、血液・造血器疾患」に関し、ナショナルセンターとの連携の下に、専門的な医療、臨床研究、教育研修及び情報発信を行います。
- ・エビデンス（根拠）に基づいた、質の高い効率的な医療を提供します。
- ・患者さんの視点に立った、安全な医療及びサービスを提供します。
- ・地域医療機関との連携を強化し、患者さん及び地域のみなさんに満足してもらえる病院

運営を行います。

- ・地域及び時代の医療ニーズに応じて意識改革を図りながら、常に健全な経営を行います。

薬剤科スタッフ

薬剤科のメンバーは滋賀病院より着任された堀内保直薬剤科長のもと、薬剤科のことをすべて把握されている上野裕和副薬剤科長、リスクマネジメントのことなら谷口喜好製剤主任、和歌山病院より赴任した私、新人調剤主任の田村憲昭、ICTのことなら太田実希薬剤師、がんのことなら中西陽一薬剤師、NSTのことならの中山実智恵薬剤師、ムードメーカーの松本信彦薬剤師の計8名です。人数は少ないですが、各自委員会等の活動を受け持ち、病院内外で積極的に行動をしています。



(平成 24 年 4 月撮影)

薬剤科について

当院はオーダリング・電子カルテを導入しており、医療安全の推進・病棟業務の効率化が図れるよう努力しています。さらに、日常業務ではIVH無菌調製、抗がん剤無菌調製、外来化学療法服薬指導、一般病棟4病棟のカートによる注射薬払い出しや重症心身障害児(者)の3病棟の調剤と大変忙しい状態にあります。チーム医療ではNST、褥瘡回診、緩和ケアチーム、ICTなどに積極的に参画しています。薬剤管理指導では昨年度月平均414件(退院指導を含む)と年間目標の月380件を上回る成績を上げています。平成24年4月より病棟薬剤業務実施加算を申請して、薬剤科メンバーで協力しあって試行錯誤しながら業務を実施しています。また、外来処方箋の一般名処方導入を平成24年7月から開始する予定で各部門、院外薬局と調整しており、本年度の診療報酬改定に対応して、質の高い薬剤業務を実施したいと考えています。また、地域住民への啓蒙活動をするため、リウマチサークルの「すみれ会」や糖尿病の会「さくら会」で講演を行い、患者に優しい医療、患者から信頼される薬剤師をスタッフ一同目指しています。

(文責：田村 憲昭)

平成 24 年度近畿国立病院薬剤師会 講演会報告

神戸医療センター 山田 雄久

日時：平成 24 年 3 月 3 日（土）

16 時～17 時 30 分

場所：薬業年金会館

参加人数：近畿国立病院薬剤師会会員 111 名

近畿国立病院薬剤師会非会員 9 名

演題：チーム医療における薬剤師によるフィジカルアセスメントについて

講師：群馬大学医学部付属病院

薬剤部主任 大林 恭子 先生

近畿国立病院薬剤師会業務検討委員会主催による学術集会に引き続き、講演会が行われた。チーム医療における薬剤師の業務としてすでに「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進を促す通知」（医政発 04 30 第 1 号 平成 22 年 4 月 30 日）において薬物療法の経過等の確認、副作用の発現状況の確認を行うことが、すでに明記されている。講演ではその任務遂行に必要な行為が、フィジカルアセスメントであること、医療チーム内ではフィジカルアセスメントから得る患者情報が他職種との共通言語となり医療安全の質の向上に繋がること、更に施設内での実施に至るまでの経緯、能力の取得に際して必要な教育プラン・フィジカルアセスメント研修の具体的な方略をご教示頂いた。



平成 24 年度新採用薬剤師研修会に参加して

大阪南医療センター 西澤 有紀

4月14日薬業年金会館で行われた平成24年度新採用薬剤師研修会に参加させていただきました。初めての研修会で緊張していましたが、他の国立病院機構の先生方や同期と交流できることにワクワクもしていました。

講義の内容は「近畿国立病院薬剤師会の活動について」、「チーム医療について」、「医療安全について」、そして医療安全についてのワークショップを行いました。

近畿国立病院薬剤師会の活動については、仕組みやスケジュール、そして総会や教育研修委員会、部会などのいろいろな会が開かれていることなどを知ることができました。地区会では近くの地域の病院と連携することで、他の病院でも身近に感じることができ、より団結が強まるのではないかと感じました。

また近畿国立病院薬剤師会の特徴の中でも、大きいネットワークを利用し、たくさんの人と交流をもつことができるということが一番の強みだと感じました。それぞれの医療機関同士の協力、信頼がないとできないことだと思います。

チーム医療については感染制御や褥瘡対策、NST、緩和ケアなどたくさんの医療チームがあり、その中で薬剤師は医療技術の進展や後発医薬品の種類の増加などで積極的に関与するべきだと感じました。実際に、制吐療法強化によるがん化学療法の変化を調べてアプレピタント投与による治療強度があがったという結果が数値化されていて大変わかりやすかったです。

私は病院薬剤師になりたかった大きな理由として、チーム医療に魅力を感じたというものがあります。しかしチーム医療に薬剤師として参加し、より質の高い薬物療法を提供できるようにするのは簡単なことではなく、幅広い領域で高い水準の知識や技術を備え、臨床で対応できる能力が必要だと感じました。患者さんにも医師や看護師にも、「薬のことなら薬剤師に」と言ってもらえるような信頼される薬剤師になりたいと思います。

医療安全については、見直すきっかけになった事故や見方の変化、医療安全対策の経緯や内容について学びました。医療事故は個々人の注意で防ぐことができるのではなく、チームや組織全体の在り方を改善しなければ事故は防止できません。人は間違ってしまうものだという意識をもって、少しでも医療事故をゼロに近づけるように、製薬会社や行政、そして薬剤科みんなが意見を出し合って安全対策していかなければいけないと感じました。

ワークショップの課題は、アマリアルとアルマルの処方間違いから患者さんに交付し重大な副作用を起こしてしまったことについてでした。グループディスカッションでは背景・要因を、医師が処方した時点から患者さんが服用し副作用が起こるまでの時間軸にそって考えました。事故が起こる要因はどこにでも転がっている事を再認識すると同時に、どこかの段階で気づくことができれば事故が起こるのを防ぐことができると感じました。

患者さんに病気や自分が服用している薬について興味を持ってもらうようにするのも薬剤師の仕事のひとつだと思います。

自分だけでは考え付かなかった多くの意見を聞くことができ、また、グループによって違う見方があり大変勉強になりました。

今は違う施設に配属になっていても、これからまた薬剤師会の活動で集まったり、将来同じ施設で働くことになるかもしれないと考えると、より仲間意識を強く感じました。また先生方も気軽に話しかけてくださり、自分の経験やこれから薬剤師として仕事をしていく上でのことなどいろいろな話をしてくださり大変うれしく感じました。とても印象的で、心強くも感じました。

今回の近畿国立病院薬剤師会に参加することによって本当に多くのものを得ることができ、これからの薬剤師としての仕事を頑張る決意を改めてすることができました。このような貴重な研修会を企画・運営してくださった先生方に改めて感謝いたします。有難うございました。

小児薬物療法勉強会の紹介

京都医療センター 朴井 三矢

当院では 2011 年 8 月に、日本小児臨床薬理学会で教育委員を務められる河田興医長が赴任され、薬剤科において小児薬物療法の勉強会を開催して頂いていますのでご紹介致します。

新生児集中治療室（以下 NICU）で使用される薬剤の多くは、新生児に対する十分な治験データが無いため、その投与量や投与方法の決定は主に医師の経験によってなされているのが現状です。NICU では薬物療法のウエイトが大きく、当院においても非常に多くの種類の薬剤が使用されており、治療対象は新生児の多くが未熟児であります。小児は成人と薬物動態が異なるため、成人の様に体重比による換算で薬物投与量を算出することはできません。この事が小児の薬物療法において『子供は小さな大人ではない』と言われる所似です。添付文書にも新生児の用法・用量が記載されていないものがほとんどであり、薬剤師の介入が困難となっている理由のひとつでもあります。

勉強会開催の背景には、薬剤師が積極的に NICU のチーム医療に関わって情報収集や研究を進めれば投与量・投与方法、有害事象などのエビデンスを蓄積することが可能になるという河田先生の考えがあります。勉強会の内容は、新生児に頻回に使用される薬物から新生児感染症や、新生児の臨床検査値の異常等多岐に亘り、新生児領域への関わりについて分かりやすく説明して頂いています。日頃疑問に思っている問題をテーマに取り上げてくださるので敷居の高かった新生児領域が、薬剤科内全体に少しずつですが身近なものになってきています。勉強会やカンファレンスの参加を通して、医師から薬剤師への期待を感じますので、新生児の病態、薬物動態などの知識をしっかりと身に付け、まずは投与量の設定に関与し、薬剤の情報を医師に提供できるよう努力しています。

NICU を含め、小児科領域において安全で適切な薬物療法を提供するため、日本小児臨床薬理学会と日本薬剤師研修センターが平成 24 年度から小児薬物療法認定薬剤師制度を創設し、今後チーム医療の一員として薬剤師の活躍が期待されています。



(写真：河田先生勉強会 5/30)

<勉強会内容>

	日時	テーマ
第 1 回	2011/11/1	新生児・乳児・小児における薬物有害反応
第 2 回	2011/11/15	新生児領域の TDM (ノーベルバール)
第 3 回	2011/12/6	母体カフェイン暴露による新生児カフェイン尿中濃度の検討
第 4 回	2011/12/27	未熟児無呼吸発作にたいするカフェイン療法について
第 5 回	2012/1/25	新生児薬物離脱症候群
第 6 回	2012/2/7	新生児の検査値と有害事象
第 7 回	2012/2/21	免疫性溶血性黄疸に対する免疫グロブリン療法 臨床試験デザインの検討
第 8 回	2012/3/6	新生児薬物投与設計 (第三世代のエリスロポエチン製剤の有用 性と安全性を検討)
第 9 回	2012/3/22	新生児の生理機能と薬物
第 10 回	2012/4/24	新生児疾患について
第 11 回	2012/5/16	ピボキシル基含有抗菌薬投与によるカルニチン欠乏症
第 12 回	2012/5/30	超低体重児の抗菌薬使用について

ASCO Gastrointestinal Symposium 2012 に参加して

大阪医療センター 榎原 克也

2012年1月19～21日に米国のサンフランシスコにて ASCO Gastrointestinal Cancers Symposium 2012 (ASCO-GI 2012) が開催された。ASCO (American Society of Clinical Oncology : 米国臨床腫瘍学会) は世界のがん治療におけるエビデンスの発信源であり、毎年6月にある Annual meeting (年会) に加え、各臓器別 (消化器がん : ASCO-GI、乳がん : ASCO-BC、尿路悪性腫瘍 : ASCO-GU など) のシンポジウムがそれぞれ年1回ずつ行われている国際学会である。

今回、ASCO-GI 2012 への参加とともに、演題発表の機会を得たので報告する。

この日、北南米、欧州、アジアの世界各国からオンコロジスト達がサンフランシスコにあるモスコウエストビルディングに集結した。消化器がんの中でもそれぞれ領域別にセッションが分かれており、1日目は上部消化管 (胃・食道)、2日目は胆・肝・膵臓、3日目は下部消化管 (結腸・直腸・肛門) を主体として、様々なエビデンスが世界に向けて発信されていた。そこでは医師や薬剤師、看護師、基礎研究者などの職種の壁はなく、“がん医療

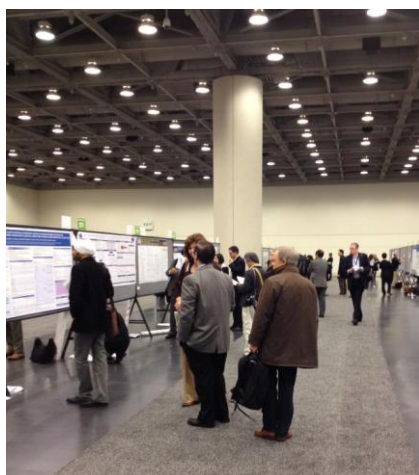


シンポジウム会場

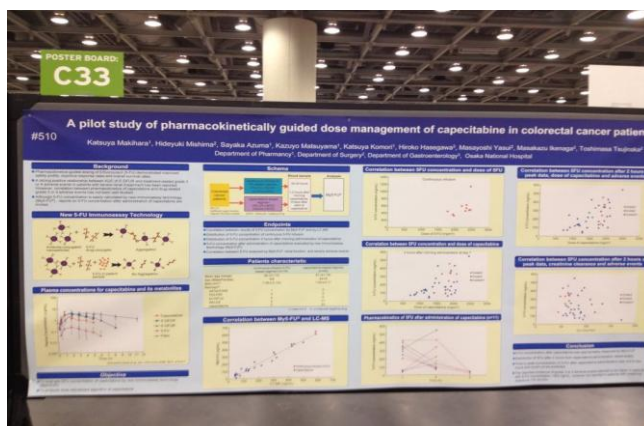
の向上”という共通のミッションを掲げ、それぞれが対等の立場でディスカッションするという正にチーム医療の本質を目の当たりにすることができた。また、胃がん領域では世界でも先進的と言われている日本人のプレゼンターが比較的多く、大腸がん領域では日本国内の学会において第一線で活躍されている外科医・臨床腫瘍内科医も多数参加されていたのが印象的である。数年前まではがん治療後進国と言われていた日本も、今や世界のがん治療を支える存在となりつつあると感じた。さらに、学会での様々な話題や最新のエビデンスを間近で知ることによって、消化器がんにおける世界の方向性を肌で感じることもできたように思う。

今回、私自身が発表の機会を得た演題は3日目の結腸・直腸がんのポスターセッションにおいて「A pilot study of pharmacokinetically guided dose management of capecitabine in CRC patients.」というタイトルで、カペシタビンを投与した患者の血中5-FU濃度の個体差や毒性との関連を検討した研究の成果を発表したものである。近年のがん治療がバイオマーカーを指標とした個別化治療へシフトしつつある中、薬物動態を指標に毒性を制御し、治療の効率を上げることで治療効果の維持を目指すことは、今後薬剤師が臨床腫瘍医や専門・認定看護師と対等にディスカッションしていく上で、必要な発想になると確信し

ている。また、わずかながら英語でディスカッションできたことは、自分にとって貴重な経験になったと同時に、英会話能力不足という新たな課題を見いだすことができた。



ポスターセッション会場



発表演題

さて、今年4月の診療報酬改定における病棟薬剤業務の新設により、チーム医療の一員として薬剤師がこれまで以上に積極的に患者の薬物治療に関わることが求められるようになり、病院薬剤師の活躍できる舞台が整ってきたところである。長寿社会の到来による“医療崩壊の危機”が叫ばれる中、薬剤師の職域拡大や資質の向上がこの国の医療に変革をもたらせうと信じている。今回のASCO-GIへの参加を通じて世界の医療を見てきたことにより、がん医療に変革をもたらす薬剤師を目指して自らが道を切り開くとともに、後進の育成にも力を注ぎたいという思いが強くなった。

最後に今回の ASCO-GI で発表したデータの一部を 2012 年 3 月に開催された臨床腫瘍薬学研究会（現日本臨床腫瘍薬学会）の第一回学術大会で発表し、優秀ポスター賞を受賞したので紹介する。今後も、わが国のがん医療を支える存在として志は高く、視点は広く持ちながら様々なことに挑戦し続けていきたい。



病院薬剤師になって

大阪医療センター 藤田 晃介

私は、この春から大阪医療センターに病院薬剤師として勤務しています。病院で働くことを決めたときから、ある程度覚悟はしていましたが、病院での仕事は、予想していた以上の忙しさで、家に帰ったときにはヘトヘトで、いつの間にか寝てしまっている、という毎日です。バタバタと忙しい毎日を送り、気付けば勤務し始めて一カ月以上が過ぎてしまいました。

私が病院薬剤師を目指そうと思い始めたのは、長期実務実習のときでした。実習中、病棟業務を見せて頂いたとき、指導して下さった薬剤師の先生は、薬に関するだけでなく、患者様を、栄養面や生活面など、様々な面でサポートしていました。患者様だけでなく、他の医療スタッフからもとても頼りにされている姿に憧れ、私も将来、薬剤師としてこうありたい、と思いました。

また、大学でも学んだ通り、現在では「顔の見える薬剤師」が求められている、ということを実習中に実感しました。調剤業務だけでなく、病棟での服薬指導、チーム医療への参画など、薬剤師としての職能を発揮できる場面が増えるとともに、大きな責任も求められると思います。私は、その様に責任のある仕事に就けることを誇りに思い、自信を持って顔を見せられる薬剤師にならなければならないと感じました。

まだまだ未熟で失敗も多く、思い描いた理想の薬剤師像には程遠いですが、忙しい中でも何かを学び、一歩ずつ、半歩ずつでも近づけるよう努力しています。「薬剤師は生涯勉強」「国家試験の合格はゴールなどではなく、スタートに過ぎない」ということは、学生時代からよく言われていましたが、本当にその通りだと、最近身をもって痛感しています。

私は、小さい頃、病院が苦手でした。独特の匂いや雰囲気があり、簡単な検査をするだけでも、とても不安になっていました。今でも、出勤して、病院に入るとき、その頃を思い出すことがあります。多くの患者様も同じように、病気になり、不安を抱えて来院されていると思います。その不安を一つでも多く取り除くことができる薬剤師になれるように、今自分にできること、すべきことは何かを考えながら日々の仕事に励んでいきます。

知識も不十分で、ご迷惑をおかけすることも多々あると思いますが、これからもご指導宜しくお願い致します。

編集後記

- ♪ 新年度が始まり 2 か月が経ちましたが、皆様体調は崩されていませんか。異動や採用の先生方は新天地には馴染まれましたでしょうか。
- ♪ 月が太陽と重なり縁がリングのように見える金環日食は本土で 1987 年以来、大阪で観測されるのは 282 年ぶりだったそうです。多くの場所で日食メガネをかざす姿が見られました。
- ♪ 今年の夏は、近畿から沖縄で高温傾向と予想されています。電力不足が心配される本年、早めの暑さ対策でくれぐれも体調にはお気をつけ下さい。
- ♪ 高さ 634m 世界第 1 位の東京スカイツリーがオープンしました。大阪のシンボル通天閣もリニューアルされ、東京のシンボルとともに関西でも熱い話題が続きそうです。
- ♪ 薬剤師の新たな業務として病棟薬剤業務実施加算の診療報酬が認められました。各施設での取り組みや準備などますます薬剤師業務も‘熱い’話題が続きそうです。
- ♪ 新年度最初の会誌です。今月号では教育研修委員長、業務検討委員長の就任挨拶、科長提言、薬剤科紹介、薬剤師会講演報告、学会報告、新採用の先生の研修報告、抱負など、いつものように充実した読みごたえのある内容となっています。今月もぜひ最後までご熟読ください。

(T. M)

近畿国立病院薬剤師会ホームページ <http://www.kinki-snhp.jp/>

近畿国立病院薬剤師会会誌

第三十号 平成 24 年 5 月発行

発行元 近畿国立病院薬剤師会事務局

大阪市中央区法円坂 2-1-14

(独立行政法人国立病院機構大阪医療センター薬剤科内)

発行人 会長 北村 良雄 (京都医療)

編集 広報担当理事 廣畑 和弘 (大阪医療)

広報委員 石塚 正行 (大阪南医療) 玉田 太志 (南京都)

本田 富得 (神戸医療) 朴井 三矢 (京都医療)

中西 彩子 (大阪南医療) 東 さやか (大阪医療)

奥田 直之 (大阪医療) 宮部 貴識 (大阪南医療)